九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芥川龍之介における女性像 ： 「第四の夫から」を視座として

陳丁, 颼颺
九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 修士課程

https://doi.org/10.15017/2344805

出版情報：九大日文. 33, pp.44-52, 2019-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

芥川龍之介における女性像

――「第四の夫から」を視座として――

陳丁颺 CHENDING Siyang

一、はじめに

芥川龍之介「第四の夫から」は、一九二五年四月一日発行の『サンデー毎日』に掲載された短編である[1]。理髪師の〈僕〉は支那人になりすまし、他の三人の夫と一人の妻ダアワを共有してチベットのラッサに住んでいる。怠惰を悪徳としない美風とダアワの容色に惹かれて、この地が気に入ったためである。第四の夫として一妻多夫の暮らしにも満足していたが、ある日妻が商人の手代と過ちを犯す事件が起こった。〈僕〉を含めた四人の夫で相談した結果、ダアワの悔恨の情の如何に任せて処置することを決め、手代にだけ鼻を削ぎ落すチベットの私刑を実行した。私刑後、妻は四人の夫を愛して平和に暮らしている。妻と手代の二人とも鼻を削ぎ落してしまえと主張した第二の夫も、その後の妻の様子を見て、鼻を削ぎ落さなくてよかったと胸をなでおろしている。いまラッサは桃の花真っ盛りである。〈僕〉はダアワに連れ出されて、不倫の後に従兄妹同志で結婚した男女の晒しものを見物に出かけるところで作品は終わる。

「第四の夫から」に関する先行研究は少なく、概括すると以下の諸氏による論究が挙げられる。

小説のテーマについて、まず須田千里は、秀しげ子との恋愛関係に立脚する女性不信のモチーフを指摘している[2]。さらに同氏は、原典[3]と小説における妻の権力の相違に着目し、「妻に関する価値観は「文明国」のままでありながら、婚姻制度はチベットのものを、夫たちが皆家に住んでいるという意味で更に強調している、という構図が見て取れ」、「むしろ「一夫一妻」から「一妻多夫」へ、固定的な婚姻からより自由な婚姻へ」[4]と、固定化された夫婦関係に対する疲労感と、そこから離れて安息を得ようとする男性主人公の逃走願望を認めている。

これを深める形で小林幸夫は、「単なる観念的な制度批判に終わらず、生きるまたは生活する上での実質の重要性」から「観念・理念の作家芥川ならぬ〈快〉追求の作家芥川なる像もこのような作品系列から引き出されることが可能であ」ると述べている[5]。また鷺只雄は、一夫一婦制を揶揄的に批判する芥川自身の願望が込められた理想郷として、作品を解釈している[6]。その延長線上に、芥川の反近代的な精神探求や、芥川文学における神話的な構築の崩壊が読み取れるという邱雅芬の指摘[7]も示唆的である。

いずれの先行論も〈僕〉＝芥川の視座から小説を眺めており、妻ダアワについての価値観に言及している須田論も、結局は芥川の自由への願望と結びつけている。このように、一妻多夫家族や、その家族の中に位置するダアワについての詳細な分析は、まだなされていないのが現状である。

「第四の夫から」と前後して、「あばばばば」（一九二四年十一月）や「或恋愛小説」（一九二五年三月）など、家の中の女性を中心とする小説が書かれていることから、芥川が秀しげ子との恋愛関係と密接に関わる女性・結婚・家庭などの問題に強い関心を持っていたことが窺える。そのため、これまであまり注目されなかった「第四の夫から」に光を当てることで、同時期に発表された作品の新しい解釈を見出すことができるのではないだろうか。さらに、一妻多夫家族という独特の題材に着目して、芥川の女性観や家庭観を考察することにも意味があると思われる。

「第四の夫から」に見られる芥川の女性観や家庭観を抽出するには、チベットの家族において中心のように見える女性＝ダアワに注目する必要があろう。「ダアワに強い権力があるなら、抑も彼女の「過ち」なるものは第五の夫獲得を意味するものであって、「過ち」とはならない」[8]と須田が指摘しているように、原典では妻が強権を握っているのに対し、ダアワは極めて伝統的で母性的な人間として描かれている。須田は〈文明国の価値観――チベットの婚姻制度〉という構図を提示しているが、この構図をより詳しく検討するには、男性中心の視点を転換させて考察を進めることが必要である。

二、ダアワの女性像

妻は名はダアワといひ、近隣でも美人と評されてゐる。背は人並みよりは高い位であらう。顔はダアワといふ名前の通り、（ダアワは月の意味である。）垢の下にも色の白い、始終糸のやうに目を細めた、妙にもの優しい女である。[9]

「ダアワは月の意味である」という部分から連想されるのは『青鞜』であろう。「元始、女性は太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である」[10]という呼びかけは、広く人口に膾炙している。

須田はダアワの容貌について、『西蔵旅行記』に記されている「不潔なる奇習」にもかかわらず、「「僕」が「垢の下にも色の白い」ダアワの「容色」に「多少は」「心を惹かれてゐる」とあることは、垢の有無による福徳ではなく、色の白さ、容色の美醜に価値を見出していることを示す」[11]と論じている。〈僕〉は支那人になりすましてチベットに住んでいながら、価値観は「文明国」＝近代日本社会のものそのものである。「色の白い、始終糸のやうに目を細めた、妙にもの優しい女」は、まさに近代日本における理想的な女性像である。

唯ラツサの市民の怠惰は天国の壮観といはなければならぬ。けふも妻は相不変麦藁の散らばつた門口にぢつと膝をかかへたまま静かに午睡を貪つてゐる。[12]

怠惰を美風とし、何もせず漫然と過ごしているダアワの日常生活が描かれている。続いて、四人の夫の仕事が提示される。「第

一の夫は行商人、第二の夫は歩兵の伍長、第三の夫はラマ教の仏画師、第四の夫は僕である。僕も亦この頃は無職業ではない。兎に角器用を看板とした一かどの理髪師になり了せてゐる」[13]。四人とも仕事を持ち、家族を養っているのに対し、ダアワは仕事もせず、「川ばたの枝垂れ柳の下に乳のみ子を抱いてゐる」だけである。原典『西蔵旅行記』のチベット家族においては、妻が権力を握るということは前述通りである。とすると「第四の夫から」のチベット家族は、夫四人を支配するダアワを中心とするはずの家族であるが、実際どうなのだろうか。

しかしダアワも女である。まだ一度も過ちを犯さなかつたといふ訳ではない。もう今では二年ばかり前、珊瑚珠などを売る商人の手代と僕等を欺いてゐたこともある。それを発見した第一の夫はダアワの耳へはひらないやうに僕等に善後策を相談した。すると一番憤つたのは第二の夫の伍長である。彼は直ちに二人の鼻を削ぎ落してしまへと主張し出した。温厚なる君はこの言葉の残酷を咎めるのに違ひない。が、鼻を削ぎ落すのはチベットの私刑の一つである。（たとへば文明国の新聞攻撃のやうに。）第三の夫の仏画師は、唯如何にも当惑したやうに涙を流してゐるばかりだつた。僕はその時三人の夫に手代の鼻を削ぎ落した後、ダアワの処置は悔恨の情の如何に任せるといふ提議をした。勿論誰もダアワの鼻を削ぎ落してしまひたいと思ふものはない。第一の夫の行商人は忽ち僕の説に賛成した。佛画師は不幸なる手代の鼻にも多少の憐憫を感じてゐたらしい。しかし伍長を怒らせない為にやはり僕に同意を表した。伍長も――伍長は少時考へた揚げ句、太い息を一つすると、「子供の為もあるものだから」と、しぶ〳〵僕等に従ふことにした。[14]

引用からもわかるように、もしダアワが本当に家権を握っているのであれば、三人の夫から鼻を削ぎ落す私刑を下されることはあり得ないだろう。須田が指摘しているように、ダアワは過ちどころか、第五の夫を獲得することになるはずである[15]。だとすれば、この家族において最終的に権力を握っているのはダアワではなく四人の夫である。彼女は経済的に独立できず、四人の男を頼り、育児に専念する主婦でしかないということになる[16]。ダアワは、「貞淑に僕等四人を愛」し、「家」に帰らざるを得なかったのである。芥川が、一夫一婦の対極に「文明国の軽蔑を買つてゐる」一妻多夫を置くことについて、婚姻の自由を追求しようとしたというふうに先行論は解釈しているが[17]、結局この一妻多夫制は男性の自由を保障するもので、女性の自由は無視されている。つまり、〈僕〉の一妻多夫制家族は、根本的に日本の近代家族と大差ない、いわゆる家父長制の家族なのである。

なお、「子供の為もあるものだから」という一節には、初出にのみある「やつぱり鼻はあのままに限る」と同じニュアンスが含まれていると思われる。妻の鼻を削ぎ落とせば子供の教育

に悪い影響を及ぼしかねないと考え、あえて私刑を実行しない夫たちの残酷さが、初出の描写から垣間見える。おそらく残酷さを和らげるために、「不幸中の幸福」に書き直して伍長に言わせるという改変が施されたのだろうが、結局ダアワの主婦としての働きが重要視されており、近代家族における子供中心主義のためと理解して差し支えないであろう。ダアワの「静かに午睡を貪つてゐる」という「怠惰」のイメージが前面に押し出されている一方で、夫が治める家に縛られ、育児や夫への奉仕に尽力する近代日本の主婦像がそこには隠されているのである。

三、「一妻多夫」という家族

「自由婚姻」を謳歌するチベットの家族は妻一人に夫四人で、「文明国」の一夫一妻や一夫多妻から見れば、「一驚を喫せずにはゐられない」ものである。なぜ同じく夫・妻・子という構成を持っているチベット家族は、近代国家の目からすれば「一驚を喫せずにはゐられない」ものなのだろうか。これについて、上野千鶴子のＦＩ（ファミリーアイデンティティ）理論[18]を用いて分析したい。上野の理論を作品に当てはめることで、この家族の反近代的に見える所以をあきらかにすることができると思われる。

形式：伝統型（妻、夫四人、子供三人は同じ家に住んでいる）

意識：非伝統型（母系同居、子供は三人いるが「誰はどの夫を父にするなどといふことはない。第一の夫はお父さんと呼ばれ、僕等三人は同じやうに皆叔父さんと呼ばれてゐる」）

上野のＦＩ理論を簡単に説明すると、「家族」の通文化的な定義が困難なため、何を家族と同定するのかという意識によって家族を成立させる理論で、一種の「境界の定義」である[19]。この理論に沿って見れば、作中のチベットの家族は非伝統的な家族意識であるため、変わっているように見えるのも無理はないであろう。大正時代で言えば、このチベットの家族はまさに反近代的な家族観の表象であるし、芥川自身の批評眼で言っても、自由を追及する反近代的な視線がそこにはあるだろう（この点については後述する）。

しかしながら、作中のチベットの家族は、果たして反近代的な家族と言えるのだろうか。以下、家族の形式についてもう少し詳しく検討する。

①家内領域と公共領域の分離
②家族成員相互の強い情緒的関係
③子供中心主義
④男は公共領域・女は家内領域という性別分業
⑤家族の集団性の強化
⑥社交の衰退
⑦非親族の排除

（⑧核家族の形態をとる）
⑨この家族を統括するのは夫である
⑩この家族は近代国家の基礎単位をなす[20]

右に示した家族モデルは、近代家族の概念として一時期引用されていた落合恵美子のモデル[21]に近代家族に特有の権力関係を組み込むため、西川祐子が内容を付け加えたものである[22]。これを小説の内容に即して見てみよう。

②家族成員相互の強い情緒的関係
「僕は三人の夫と共に、一人の妻を共有することに少しも不便を感じてゐない。他の三人も亦同様であらう。妻はこの四人の夫をいづれも過不足なしに愛してゐる」[23]

③子供中心主義
「伍長は少時考へた揚げ句、太い息を一つすると、「子供の為もあるものだから」と、しぶ〳〵僕等に従ふことにした」[24]

④男は公共領域・女は家内領域という性別分業
「第一の夫は行商人、第二の夫は歩兵の伍長、第三の夫はラマ教の仏画師、第四の夫は僕である。僕も亦この頃は無職業ではない。兎に角器用を看板とした一かどの理髪師になり了せてゐる」[25]「川ばたの枝垂れ柳の下に乳のみ子を抱いてゐる妻の姿」[26]

⑤家族の集団性の強化
「ダアワは爾来貞淑に僕等四人を愛してゐる。僕等も、――それは言はないでも好い。現にきのふ伍長さへしみじみと僕にかう言ってゐた。――「今になつて考へて見ると、ダアワの鼻を削ぎ落さなかつたのは実際不幸中の幸福だつたね。」」[27]

⑦非親族の排除
「もう今では二年前ばかり前、珊瑚珠などを売る商人の手代と僕等を欺いてゐたこともある。それを発見した第一の夫はダアワの耳へはひらないやうに僕らに善後策を相談した」[28]

（⑧核家族の形態をとる）[29]

⑨この家族を統括するのは夫である
「すると一番憤つたのは第二の夫の伍長である。彼は直ちに二人の鼻を削ぎ落してしまへと主張し出した」[30]

①⑥⑩は明確に言及されていないが、右の照合から分かように、この一妻多夫の家族は見た目こそ奇妙であるが、まぎれもなく一つの典型的な近代家族の一形態である。芥川は近代の日本社会ではあり得ない反近代的な家族を描いているように見えるが、実際には、男女の位置が互換しながらも、近代的な家父長制を持つ近代的な家族を描いているといえるのではないだろ

うか。「第四の夫から」における一妻多夫は、元をたどると一夫多妻の変形なのかもしれない。

四、芥川と女性

僕は　世間の人のやうに　結婚と云ふ事と　いろいろな生活上の便宜と云ふ事とを一つにして考へる事の出来ない人間です。(31)

ボクは何だかその静な家庭が羨しくなりました（芸者のやうな奥さんはちつとも羨しくはありません）ああやつて落着くべき家庭があつたら　ボクも勉強が出来るだらうと思つたのです（中略）ストリントベルクと云ふ異人も「女は仕事をしてゐる時と子供の守りをしてゐる時とが一番美しい」と云つてゐます　ボクもさう思ひます(32)

文ちゃんは何にも出來なくつていいのですよ　今のまんまでいいのですよ　そんなに何でも出来るえらいお嬢さんになつてしまつてはいけません(33)

右の引用は、結婚前の芥川が塚本文に宛てた書簡の一部である。文に対する芥川の自己アピールも含まれていると思われるが、こうした書簡から、文はそのままでいい、そして自分はいい加減な気持ちではないから文をもらいたい、という芥川の塚本文に対する思いが伝わってくる。その一方で、この頃からすでに、「女は仕事をしてゐる時と子供の守りをしてゐる時とが一番美しい」、「そんなに何でも出来るえらいお嬢さんになつてしまつてはいけません」などのような、家庭中心の女性が理想的だとする観念も垣間見えている。ここで、一九二四年四月号の『婦人公論』に掲載された、あるアンケートに対する芥川の回答を見てみよう。

出来るだけ温良貞淑を装ひ、出来るだけ都合の好い夫を捉へ、出来るだけ巧みに夫を操り、出来るだけ自己を成長させます。所謂経済的独立などは少しも得たいとは思ひません。そんなものは得たところが、反つて少しも余力を持たない奴隷生涯に入ることですから。(34)

できるだけ「温良貞淑を装ひ」、「都合の好い夫」を捉えるという箇所は、恋愛の自由を訴える文句として受け取れよう。さらに「女性改造談話会」（『女性改造』一九二四年八月号）で芥川は、一夫一婦への批判に対し、ビスマルクの第十人目の妻や、小野小町の第十何号の夫になったほうが好ましいとしている。(35)ここからも、恋愛では男女を問わず自由が許されるべきだとする芥川の姿勢が窺える。

芥川は、反近代的な精神を表明すると同時に、女性の温良貞淑と夫への依存は不可欠なものであると考えている。経済的に独立して奴隷生活を強いられるより、ダアワのように家事や育

児以外何もしない生活の方が理想的だということである。アンケートへの回答と談話だけではなく、例えば五島慶一は、「恋愛と夫婦愛とを混同しては不可ぬ」（『家庭雑誌』一九二五年五月号）など芥川の評論からも、芥川の恋愛への幻滅と結婚の現実性への認識が示されていると述べ、家庭的な女性像を芥川の理想としている[36]。「第四の夫から」はまさにそれらの認識と理想に基づいた作品ではないだろうか。「夫」や「妻」というように、男女の立ち位置が家族関係に限定されることの裏には、恋愛の自由とは別に、「家」を男女関係の帰趨として見る視線が潜んでいるといえるだろう。のみならず、この「家」には、男性（芥川）にとって癒しとなる場所や、厳しい社会からの逃避所というイメージよりも、夫への依存・服従や子育てなど、主婦の役割を全うするための場所というイメージが強調されている。

「主婦」の背後には、変化しながらも明治以降の社会に根強く生きている伝統的な価値観や習俗が存在する。例えば、新婦人協会（一九二〇年）や赤瀾会（一九二二年）が政府による弾圧を受けていたことなど、多くの事情[37]から、当時の婦人が直面していた社会的抑圧の厳しさが窺える。「女性教育の必要性は「家を守ること」を中心に展開し、ここにはもはや女子をまず人間としてめざめさせようとした息吹はどこにも感ぜられ」ず、女性は「家庭の〝有用な道具〟として」期待されていた[38]。もちろん、「新しい女」を声高に呼びかける『青鞜』の女性解放運動など、女性に自覚を持たせ、真正の自主的な婦人たらしめようと努める潮流もあった。しかし、その『青鞜』が内外から非難を浴びせられていたことからも、日本での地盤が成長しつつあり、大きな波瀾を巻き起こしたとされる婦人問題が、そこまで社会通念を揺るがしていないことは明らかである。

以上の内容に照らしてみれば、ダアワは『青鞜』の目指す独立的な女性とは正反対の、当時の社会全体が求めていた主婦像に合致しているといえる。家を捨ててまで愛人と出奔する、夫に対して非依存的な女性の姿がダアワには見えない。原典にある妻の強権は実現し得るはずがなく、家族内の役割に根本的な変化がないため、妻は依然として家父長制に拘束され、服従の立場にさらされ続けなければならない。芥川が描いたこの理想郷のような家は、ダアワ＝女性にとっては理想郷とならず、従来どおりの家父長制家族である。しかしかえってそれは、当時の日本社会における女性の現状を反映し、「主婦」という役割に従属を強いられた女性の姿を鮮明に描写しているように思われる。

一方で、芥川の書簡やアンケートへの回答を通して見れば、女性に恋愛の自由が認められたとしても、「家」という場では、その自由は社会認識による制限を余儀なくされてしまう。その意味で、芥川は「同時代は勿論、ヘタをすると今日にまでこの社会に根強く尾を引いている一般大衆にありがちなジェンダー論＝異性や結婚制度に対する態度と根本的には変わらない価値観に支配されている一面もあると言えるだろう。[39]

五、むすび

本論文では、「第四の夫から」におけるダアワの女性像について、当時の社会における主婦の立場を考慮に入れつつ検討を試みた。一見すれば奇妙に映る一妻多夫の家族は、突き詰めれば、夫が主導し、妻が支配される近代的な家族であることが明らかになってくる。一妻多夫の家庭においても、近代日本の家庭においても、ダアワのような女性は近代的な家父長制イデオロギーの束縛から解放されていない主婦であるということを、小説の描写から垣間見ることができる。さらにそこから、芥川文学における女性像の片鱗を拾い上げることもできるのではないだろうか。なお、一夫多妻や一夫一婦の対極である一妻多夫を描くということを、芥川文学全体の中でどのように位置づけるのかについては、今後の課題としたい。

【注記】

1 『芥川龍之介全集』第十一巻（岩波書店、一九九六年十一月）の「後記」（石割透）では、芥川自身の書き入れや草稿に基づいて修正された資料が紹介されており、「岩波書店から刊行された従来の全集に収録されているものは、この書き入れ、書き加え原稿に基づいているようであ」る。

2 須田千里「『芥川龍之介全集』未収録の文章について」『日本近代文学』四三、一九九〇年一〇月

3 須田は、「第四の夫から」の原典は『西蔵旅行記』（一九〇四年三月二三日・五月一四日、博文館刊）であると述べている。

4 須田千里「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』――その典拠と主題をめぐって――」『光華日本文学』四、一九九六年八月、七九～八〇頁

5 関口安義他編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、二〇〇〇年六月、三一四頁

6 菊池弘他編『芥川龍之介事典』明治書院、二〇〇一年七月、三〇九頁

7 邱雅芬『芥川龍之介の中国――神話と現実――』花書院、二〇一〇年三月

8 前掲注4に同じ、八九頁

9 芥川龍之介「第四の夫から」『芥川龍之介全集』第一一巻、岩波書店、一九九六年九月、一七頁

10 平塚らいてう『平塚らいてう著作集』第一巻、大月書店、一九八三年六月、一八頁

11 前掲注4に同じ、七九頁

12 前掲注9に同じ

13 前掲注9に同じ

14 前掲注9に同じ、一八～一九頁

15 前掲注4に同じ

16 主婦について説明を付け足すと、その役割として、①もっぱら女に割り振られ、②経済的に依存しており、③労働として認知されず、④女にとって主たる役割であるという四つの特徴が挙げられる（井上輝子他編『女性学事典』岩波書店、二〇〇二年六月、一九三～一九四頁）。以上の特徴をダアワに当てはめることができる。

17 前掲注4に同じ

18 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』岩波書店、二〇〇八年九月、五頁

19 前掲注18に同じ

20 西川祐子『近代国家と家族モデル』吉川弘文館、二〇〇〇年十月、十四〜十五頁
21 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房、一九八九年一二月
22 前掲注20に同じ
23 前掲注9に同じ、一八頁
24 前掲注9に同じ、一九頁
25 前掲注9に同じ
26 前掲注9に同じ、一八頁
27 前掲注9に同じ、三八六頁
28 前掲注9に同じ、一八頁
29 西川は、この項目をカッコに入れるのは、核家族の形態を必ずしもとらない日本の戦前家族を近代家族として扱うことを可能にするためであると解している。したがって、ここではこの項目は扱わないことにする。
30 前掲注9に同じ、一八〜一九頁
31 大正五年八月二五日付塚本文宛書簡、芥川龍之介『芥川龍之介全集』第一八巻、岩波書店、一九九七年四月、四二頁
32 大正六年五月三一日付塚本文宛書簡、前掲注31に同じ、一一三頁
33 大正六年九月一九日付塚本文宛書簡、前掲注31に同じ、一四二頁
34 芥川龍之介「私が女に生れたら」『芥川龍之介全集』第十巻、岩波書店、一九九六年八月、四六頁
35 芥川龍之介「女性改造談話会」『芥川龍之介全集』第一六巻、岩波書店、一九九七年二月、一〇四頁
36 五島慶一「芥川龍之介作品における女性表象：並びに彼の恋愛・結婚観の一面」『文彩』一〇、二〇一四年三月、四七〜四九頁
37 帯刀貞代『日本の婦人――婦人運動の発展をめぐって――』岩波書店、一九七六、二〇〜二八頁
38 田中寿美子『近代日本の女性像』社会思想社、一九七八年五月、一〇五頁
39 前掲注36に同じ、四七頁

（九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程一年）